

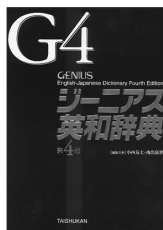
『ジーニアス英和辞典』

〈第4版〉

小西友七・南出康世 編集主幹

高瀬 博

(福岡県立香椎高等学校教諭)



平成18年12月、「20年目の大改訂」をキャッチフレーズに待望の『ジーニアス英和辞典』〈第4版〉(以下G4)が誕生した。改訂前とどこがどう変わったのかを検証していくことにしよう。

【新語・新語義の増強】

Norovirus(ノロウイルス)やfrankenfood(遺伝子組み換え植物使用食品)などのよく耳にする単語の掲載のみならず, generic drugの項では「後発医薬品《特許が切れた後に製造された(低価格の)薬》」という適切な解説がつくなど, ビジネス英語やTOEICにも対応できる。

【語義の配列の見直し】

コーパスを最大限利用し, 現代の使用頻度を徹底的に検証し実態に応じた語義の配列を実現。abuseを例にとると, 最近よく耳にする「虐待」を第一義にあげている。

【実態を反映した画期的な発音表記】

英米で実際によく使われている発音を徹底的に調査し, それを発音表記に反映している。たとえば, carryの発音も米音は /kéri/ より /kéri/ を優先した表記になっている。marry, gharry, harry, parry, tarryなどもこの例にあてはまるようだ。

【多義語に語義展開図を新設】

英語には多義語が多い。そこで, 最重要語については「その語にはどんな意味があるのか」を示す語義展開図を置くことにより, その単語の持つ意味の輪郭がつかめるようにしてある。

たとえばserveの項では, (1)仕える, 尽くす (2)出す (3)かなう, 役立つ (4)務める と4つの大区分をした上で, その下位区分をわかりやすく示してある。

【レキシカルフレーズと成句の充実】

ネイティブスピーカーがchunkとして認識している決まった場面で用いられる固定した表現 (lexical phrase) には赤い三角マークをつけ目立たせている。actを例にとると

He is not acting like himself.

彼はいつもの彼ではない, 少し変だ。

Don't act like a fool. ばかなまねはよしなさい。などがあげられている。またこうした固定表現を積極的に成句見出しに取り上げているのも今回の特徴だ。

「IOU」が「借用証書のことで, I owe you. に由来する」のはご存じの通りだが, G4では, oweを調べることにより, 次の慣用表現を知ることができる。

I owe you one. ひとつ借りができたね。

You owe me one. ひとつ貸しができたね。

【コロケーションの充実】

コーパスで得られた用例中, 特に頻度の高い連語 (collocation) はやや太い斜字体で示してある。たとえばlunchを調べると, 基本的な意味の他に, Let me **buy** you **lunch**. (昼食をおごるよ), They **serve nice lunches** here. (ここはうまい昼めしを食わせるよ) といったコロケーションを知ることができる。

【語法解説のさらなる充実】

『ジーニアス』と言うと「語法に強い」という定評がある。今回の改訂でも, officeの項ではShe has already left the office. と She has already left office. の違いを読むと go to the school と go to school の違いを学習した時のことを思い出させてくれる。また join と join in の違いも「なるほど」と納得のいく説明でわかりやすい。

【前置詞の図解】

英語学習者にとって最も難しいものの1つ「前置詞」についても, 各前置詞に立体的なイメージ図を入れ, 基本義や用法をわかりやすく説明してある。詳しくは along や around の項を参照してほしい。

以上述べてきた以外にも, 見出し語における人名に男女を示す記号をつけたり, 高校生に必修の語法に赤の網掛けをしたりと, 「読者にやさしい」気配りがなされている。実際の生活で使える例文も豊富だ。新しく生まれ変わったG4.使ってみる価値はありそうだ。

英語語彙指導ハンドブック

門田修平・池村大一郎 編著

野呂忠司

(愛知学院大学教授)



本書の一番の良さは、指導と理論を融合させているところにあります。実践編の後に「基礎知識」欄や心内辞書などの理論の章を設けています。語彙習得の理論が分かれば、応用ができるだけでなく、自信を持って指導ができるでしょう。是非一読をお薦めします。

「未知語の和訳を単語の指導」としてきた教師には1章、2章が役立ちます。新出語の導入には、形式に注意を払わせ、正しい意味概念を理解させることと、記憶保持ができるように学習者を活動させることが必要です。例えば、オーラルイントロダクション、TPR、中核的意味の利用などは有効な方法です。

「単語テストで語彙の定着を図ろう」としてきた教師には、3章と5章が役立ちます。テストをするだけでは長期記憶にはつながりません。音読やシャドーイングによる繰り返し、二度読みによる定着の強化、タスクによって単語を実際に使わせる方法、語形成の知識の活用は役立つでしょう。ロールプレイなど、4技能で使われる異なる語彙指導法は参考になります。

「学習者の語彙力を増やしたい」という教師には、4章が役に立ちます。単語帳や辞書の利用だけでなく、電子辞書の活用法も紹介しています。多読は、読解力をつけるにも、未知語の推測力を養うにも、sight vocabularyを増やすにも大切だと指摘しています。

上記の他に、単語を知っているとはどういう意味か(1章)、文字と音声の関係(6章)、注釈の効果、偶発的語彙習得、語彙ネットワーク(4章)、語彙テスト(7章)、語彙の習得と語彙知識の貯蔵場所(8章、9章)、単語の持つ文法特性(10章)、二言語話者のL1とL2の語とその意味概念の結びつき(11章)、コンピュータの活用(12章)など興味ある情報が満載です。

間違いだらけの海外留学

——親と子に贈る「成功」のルール

桑原京美 著

澤 玲子

(「留学ジャーナル」編集長)



昨年から子育て雑誌がちょっとした話題になっている。「プレジデント Family」「日経 Kids+」「AERA with Kids」等、子育てといっても幼児ではなく、小・中学生のお子さんを持つ家庭に向けたもの。いずれの雑誌も子どもを「のびのびと『優秀に』」育てるノウハウが満載なのだが、「留学」もレギュラーで登場するコンテンツとなっている。

そんな潮流もあり、最近子どもの留学・親子留学が目立っているが、著者の桑原さんは18年前前から小中高校生を対象とした留学コンサルタントとして、数多くの「子どもの留学」を実現してきた。ただ、その年月の中には留学したのに伸びない子ども、挫折する子ども、ドロップアウトしてしまう子どもなど、「留学させて良かったのだろうか？」と感じるケースも少なくなかったという。本書ではそんな失敗事例も多数盛り込みつつ、留学先の選び方、情報収集の仕方、子どもへのサポートの仕方など、成功のための指南をしている。なによりケーススタディが多数引用されており、18年間蓄積してきた経験がぎっしり詰まっているといったら良いだろう。また、各国の教育制度や留学情報サイトなど具体的な情報も押さえられている。

ところで、何をもって子どもの留学を「成功」とすべきなのだろう。成果として英語力や国際的な視野を身につけること、名門大学への入学を果たすこと…著者はそれよりも「自信と生きる力」が得られることだという。そして成功のカギとなるのは「親と子の絆」。親子のコミュニケーションが良く、お互いに信頼しあい、良好な関係であれば、留学は成功する。そして、留学で親子の絆を一層強めることもできる。この事実こそ、著者が最も伝えたかったことだろう。